

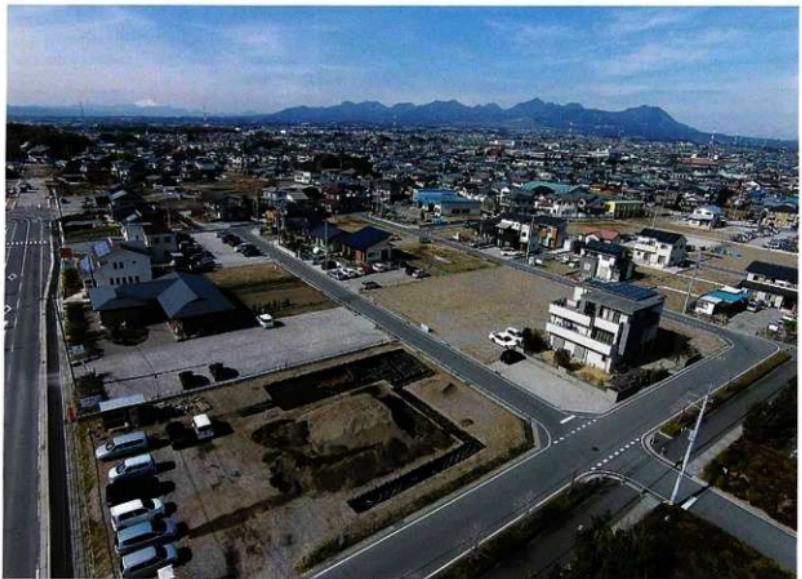
# 棟高南寝暮窪遺跡

---

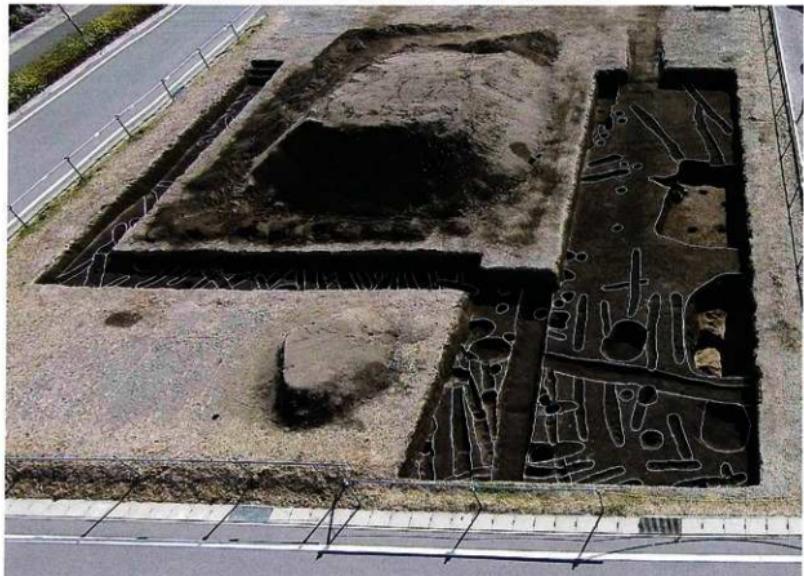
—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2015

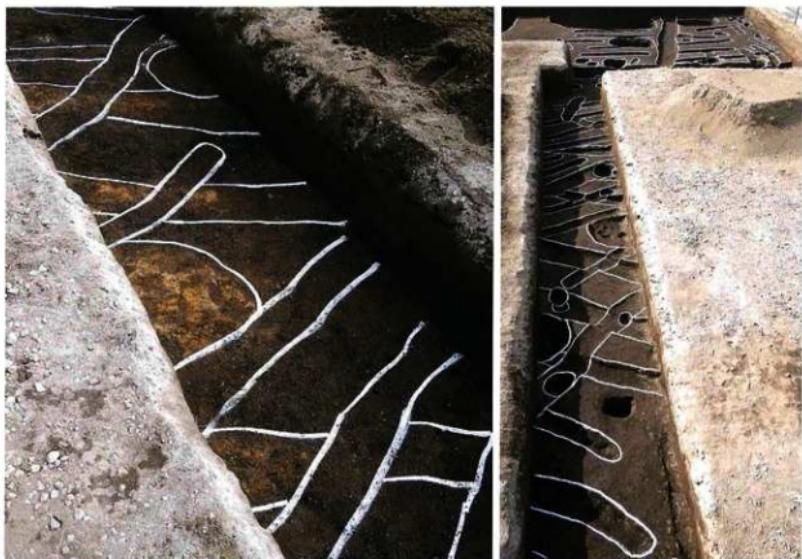
高崎市教育委員会  
株式会社まるおか  
有限会社毛野考古学研究所



遺跡遠景（南東から、後方に榛名山と左奥に浅間山を望む）



調査区全景（北から、竪穴住居跡の周間に畠跡が広がる）



北側調査区の畠跡（左が検出状況、右が完掘状況、畠跡に重複があり Hr-FA 混土の畠跡が古い）



北側調査区の畠跡土層断面（Hr-FA 混土の畠跡の下にも、As-C 混黒色土の畠跡が存在する可能性）



廃絶した住居を利用した粘土探掘坑（1号住居跡、主に灰白色のX層を探掘する）

## 例　　言

1. 本書は、株式会社まるおかによる店舗建設工事に伴う棟高南寝暮塗遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 「棟高南寝暮塗遺跡」は、群馬県高崎市棟高町中央第2区画整理事業45街区4番地に所在する。

3. 発掘及び整理調査の期間・発掘調査の面積は次のとおりである。

【発掘調査期間】 平成27年1月19日～平成27年2月6日

【整理調査期間】 平成27年2月9日～平成27年7月31日

【発掘調査面積】 189.15m<sup>2</sup>

4. 発掘及び整理調査は、株式会社まるおか・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。

5. 発掘及び整理調査に関わる経費はすべて株式会社まるおかの負担による。

6. 発掘及び整理調査は、常深尚（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、遺物実測は有山徑世（有限会社毛野考古学研究所）が分担した。

7. 本書の編集・執筆については、田辺芳昭（高崎市教育委員会文化財保護課）・常深が協議して行い、第1章を田辺、その他を常深が執筆した。

8. 遺構及び遺物の写真は常深が撮影し、空中写真は和久拓照（有限会社毛野考古学研究所）が撮影した。

9. 調査資料は、一括して高崎市教育委員会で保管している。

10. 発掘及び整理調査の参加者は、以下のとおりである。

（発掘調査） 青木あつ子 青木麻耶 碓井俊夫 亀田浩子 小出拓磨 設楽和也 永井述史 山崎智晴  
（整理作業） 大塚親子 亀田浩子 合田幸子 関小百合 武士久美子 伴場りく 山下美樹

## 凡　　例

1. 掘図中に使用した方位は、国家座標（IX系）の北を表す。座標軸は世界測地系である。

2. 本書ではテフラの呼称として次の記号を用いた。

Hr-FA : 6世紀初頭噴出の棟名ニッ岳洪川テフラ、Hr-PP : 6世紀中頃噴出の棟名ニッ岳伊香保テフラ

As-C : 3世紀終末から4世紀初頭噴出の浅間Cテフラ、As-B : 1108（天仁元）年噴出の浅間Bテフラ

As-A : 1783（天明三）年噴出の浅間Aテフラ

3. 遺構の表記は以下の記号を用いた。

SD : 溝 S I : 壺穴住居跡 SK : 土坑 SP : ピット

4. 遺構及び遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

【造構】 全体図…1/200 壺穴住居跡…1/60 カマド…1/40 土坑…1/60

溝…1/100、1/60 岩跡…1/150、1/60

【遺物】 土器…1/3

5. 遺物番号は、実測図・観察表・写真図版とともに共通である。

6. 本文・土層断面図・土層注記中のローマ数字は基本土層、算用数字は造構内堆積土の層番号を表す。

7. 土層及び遺物の色調は「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄著 御日本色彩研究所）を使用した。

## 目 次

卷頭図版・例言・凡例・目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と経過	6
第1節 調査の方法	6
第2節 調査の経過	6
第4章 標準堆積土層	7
第5章 遺構と遺物	8
第1節 調査の概要	8
第2節 壁穴住居跡	9
第3節 土坑・ピット	15
第4節 溝	17
第5節 崩跡	17
第6節 造構外出土遺物	19
第6章 調査成果	20
写真図版・抄録・奥付	

## 挿図目次

第1図 調査区域図	1	第9図 2号住居跡平面図・断面図	12
第2図 調査区域図	2	第10図 2号住居跡出土遺物	13
第3図 棚高南寝暮塗遺跡位置図	3	第11図 1号～6号土坑平面図・断面図	15
第4図 棚高南寝暮塗遺跡周辺の遺跡分布	4	第12図 7号～9号土坑平面図・断面図、 5号土坑出土遺物	16
第5図 標準堆積土層	7	第13図 1号・2号溝平面図・断面図	17
第6図 棚高南寝暮塗遺跡全体図	8	第14図 崩跡平面図・断面図	18
第7図 1号住居跡平面図・断面図	9	第15図 造構外出土遺物	19
第8図 1号住居跡出土遺物	10		

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	5	第4表 5号土坑出土遺物観察表	16
第2表 1号住居跡出土遺物観察表	11	第5表 ピット一覧表	16
第3表 2号住居跡出土遺物観察表	14	第6表 造構外出土遺物観察表	19

## 写真図版目次

P L. 1 調査区全景(空撮、上が北)	5号土坑全景(東から) 6号土坑全景(南から)
P L. 2 西側調査区北部全景(南東から) 東側調査区全景(北から) 西側調査区北部全景(東から) 西側調査区南部全景(北西から)	P L. 4 1号溝全景(南から) 2号溝全景(東から) 北側調査区崩跡土層断面(南東から) 北側調査区崩跡土層断面(南から)
P L. 3 1号住居跡全景(南から) 2号住居跡全景(西から) 2号住居跡カマド全景(西から) 2号住居跡掘り方全景(北西から) 1号土坑全景(西から)	P L. 5 1号住居跡出土遺物 P L. 6 2号住居跡出土遺物 5号土坑出土遺物 造構外出土遺物

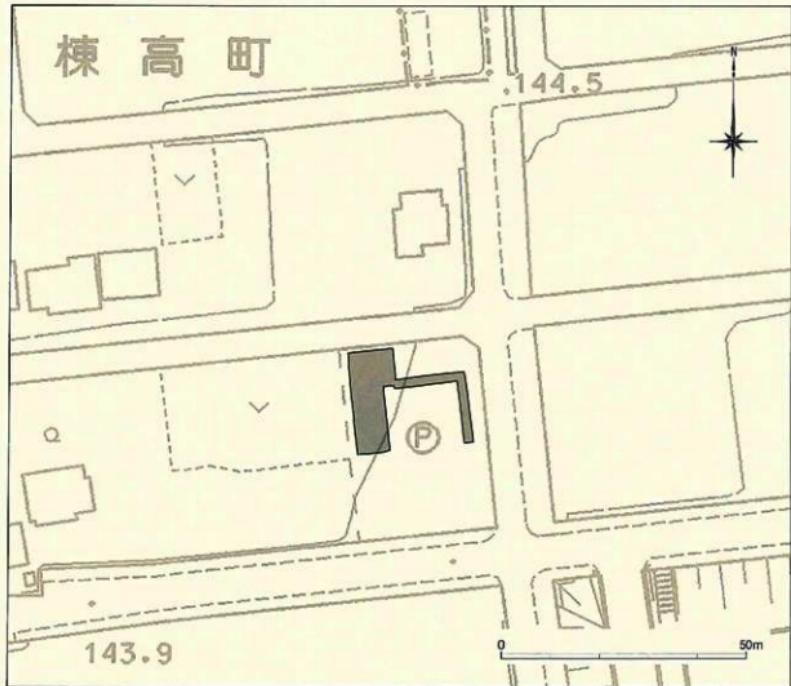
## 第1章 調査に至る経緯

平成26年11月、株式会社まるおか（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に店舗建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地は埋蔵文化財包蔵地であるため、試掘調査による確認を実施し、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

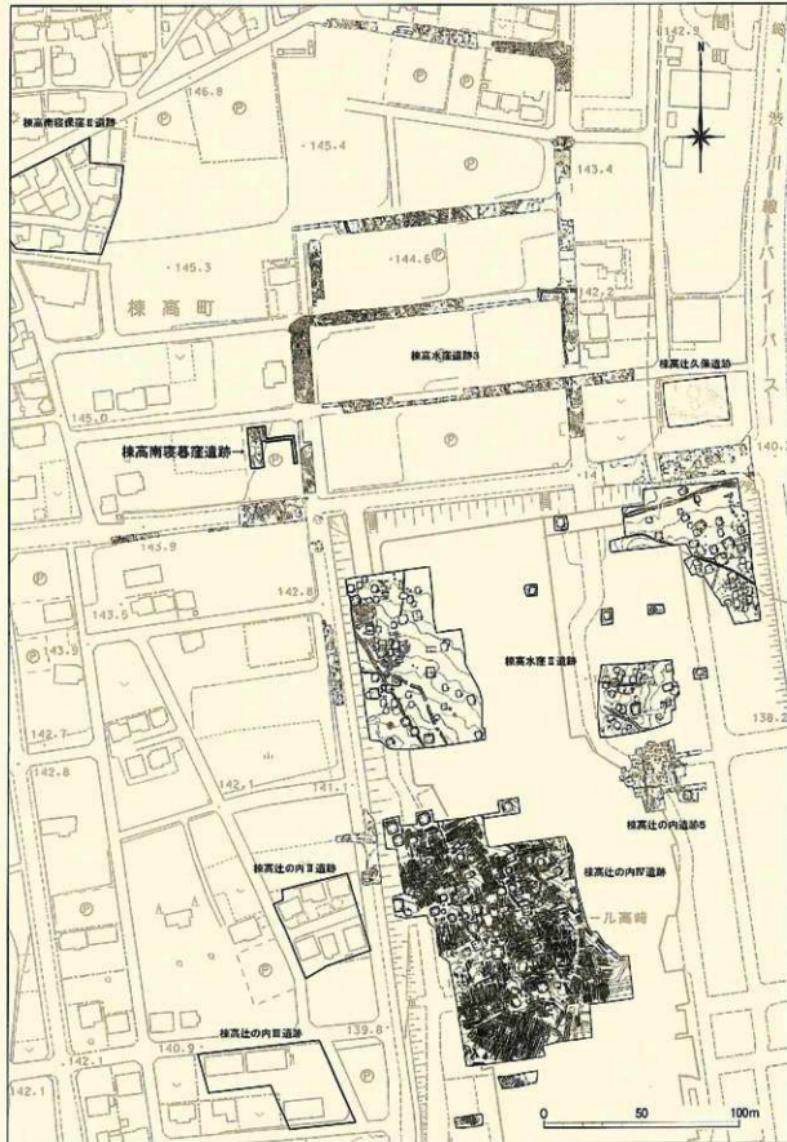
同年11月6日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年11月28日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳時代頃の堅穴住居跡及び鹿跡などの遺構を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、計画変更是不可能ということなので、開発予定地の内、埋蔵文化財に影響のある部分について記録保存の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成27年1月13日付けで高崎市教育長・事業者・有限会社毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成27年1月13日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図 調査区域図（高崎市発行『高崎市都市計画基本図』1/2,500を250%拡大）



第2図 調査区域図（高崎市発行『高崎市都市計画基本図』1/2,500）

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 地理的環境

棟高南寝幕塚遺跡は、高崎市棟高町（旧群馬町）に所在する棟高遺跡群の一部である。棟高遺跡群は関東平野最奥部に聳える榛名山の東南麓に位置する。榛名山東南麓には標高600m付近を扇頂とする相馬ヶ原扇状地が広がるが、この扇状地は14,000年前～13,000年前に形成された古期扇状地面と5,000年前頃までに形成された新期扇状地面に分かれる。棟高遺跡群は新期扇状地面の扇端部にあって、標高140m前後の東南への緩斜面地に位置する。扇状地上には扇状地面を水源とする中小河川（牛池川、染谷川、天王川、唐沢川、井戸川など）が放射状に流れ、棟高遺跡群は染谷川と天王川に位置している。棟高遺跡群周辺に散見する「塙」「久保」を含む地名は、扇端部の湧水との関連が窺われ、既往の調査でも湧水点が検出されている。また棟高遺跡群の南西部では奈良・平安時代の洪水によって埋没した谷地も確認されており、遺跡のあり方を考える際にこのような水場の存在は欠かすことができない。

旧群馬町地域は、火山の噴火によるテフラが堆積する地域である。榛名山起源では、6世紀初頭に噴出した火山灰である榛名ニッ岳渋川テフラ（Hr-FA）、6世紀中葉に噴出した軽石である榛名ニッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）がある。Hr-FAは谷底低地などで15cm前後の堆積があり、Hr-FPは軽石の堆積はないものの噴火に起因する土石流の堆積が確認される。浅間山起源では、3世紀終末から4世紀初頭に噴出した軽石である浅間Cテフラ（As-C）、1108（天仁元）年噴出の軽石である浅間Bテフラ（As-B）がある。As-C・As-Bともに谷底低地などで10cm前後の堆積が確認される。



第3図 棟高南寝幕塚遺跡位置図（国土地理院発行『宇都宮』・『長野』1/200,000を50%縮小）

## 第2節 歴史的環境

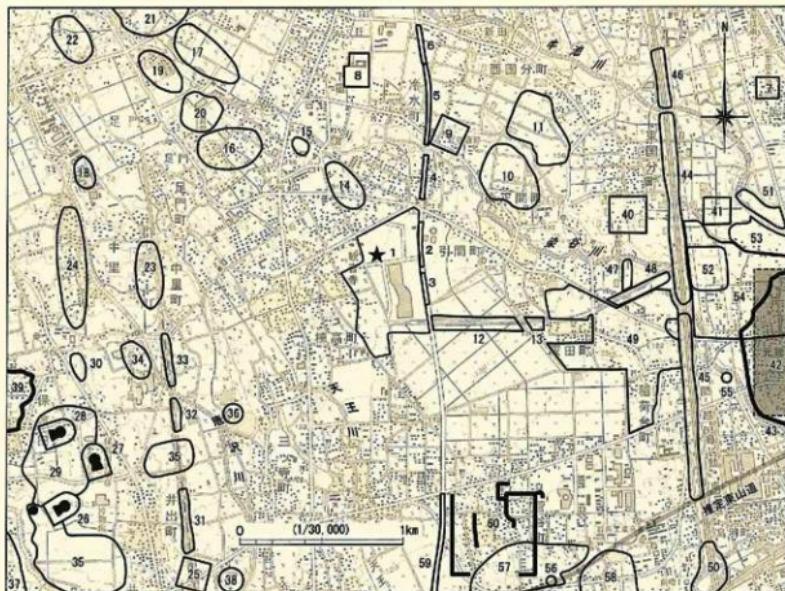
### 【縄文時代・弥生時代】

縄文時代は、棟高遺跡群(1)では前期後半・中期後半～後晩期の遺物が散見されるが、造構は未発見である。住居跡は三ツ寺Ⅱ遺跡(31)の前期中葉、上野国分僧寺・尼寺中間地域(44)の前期後半と中期後半、鳥羽遺跡(45)の晩期のものがある。北谷遺跡(9)では晩期の土器が谷から出土している。弥生時代では本遺跡に隣接する小池遺跡(2)・西三社免遺跡(3)で中期後半以前の遺物が散見される。集落遺跡は上野国分僧寺・尼寺中間地域(44)で中期後半、棟高辻久保遺跡(12)・三ツ寺Ⅱ遺跡(31)で後期の住居跡が確認されている。

### 【古墳時代】

前期の集落は上野国分僧寺・尼寺中間地域(44)・鳥羽遺跡(45)・元総社西川遺跡(47)・寺屋敷Ⅰ遺跡(20)・保渡田Ⅵ遺跡(29)で確認される。As-Cに埋没した水田は元総社北川遺跡(51)、島跡は西国分新田遺跡(6)で調査される。本遺跡に隣接する小池遺跡(2)・西三社免遺跡(3)でも住居跡が調査されている。

中期の遺跡は少ないが、後期に入ると、5世紀後半に井伊川流域において大型の前方後円墳が相次いで造営される（保渡田古墳群26～28）。同時期の豪族居館跡である三ツ寺Ⅰ遺跡(25)・北谷遺跡(9)は地域開発の拠点として位置づけられ、井出地区遺跡群(35)・元総社北川遺跡(51)の水田や棟高遺跡群(1)における畠跡など広範囲に生産遺跡が広がる。6世紀初頭のHr-FA降下以後には、染谷川や牛池川を下った總社地域周辺では造構が増加し（上野国分僧寺・尼寺中間地域44、鳥羽遺跡45など）、終末期の總社古墳群、山王庵寺(7)へと連なる。



第4図 棟高南寝墓窟遺跡周辺の遺跡分布（国土地理院発行『下室田』・『前橋』1/25,000を83%縮小）

桙高遺跡群周辺では、やや遅れて6世紀末から7世紀前半に居住城が濃密となり（小池遺跡2・西三社免遺跡3、桙高辻久保遺跡12、国府南部遺跡群49など）、群集墳（北寂保塚古墳群14、如意古墳群17、寺屋敷古墳群19、庚申古墳群21など）の造営も7世紀後半にかけて活発となる。

### 【奈良・平安時代】

古代上野国の国府は本遺跡から染谷川を下った總社地域に想定され(42)、本遺跡の東約2.5kmの距離にある。大規模な区画溝・掘立柱建物跡の検出や「國府」墨書き土器の出土が知られる。国府城の北西には上野郡分僧寺(40)・上野郡分尼寺(41)が建立される。本遺跡の2.1km南東付近に位置する高員戸遺跡(56)の道路遺構は、古代の官道である東山道駿路「国府ルート」と推定され、初期の駅路「牛堀・矢の原ルート」に後出する9世紀後半以降の整備が想定されている。8世紀代の集落は本遺跡周辺では小池遺跡(2)・西三社免遺跡(3)・諏訪西遺跡(4)などで確認され、9世紀にかけて拡散する状況である。桙高遺跡群（桙高水床II遺跡）では、9世紀前半の鐵冶遺構や瓦塔・円面鏡などの出土も知られる。1108(天仁元)年の浅間山噴火によって埋没した水田跡は桙高辻久保遺跡(12)などで確認されている。

### 【中世】

15~16世紀にかけては、長尾氏の蒼海城(43)、長野氏の箕輪城が領域支配の拠点として築かれ、各地に元井出館跡・花城寺館跡（井出地区遺跡群35）・保渡田城跡(39)・菅谷城跡(60)などの城館が整備された。

No	遺跡名	主な時代	主な文献	No	遺跡名	主な時代	主な文献
1	桙高遺跡群	飛文・古墳~後世		31	三ツ寺遺跡	飛文・盛安後期~	昭和190「三ツ寺遺跡」
2	小池遺跡	飛文・古墳後期~平安・中世	平成20年「高員戸遺跡 桙高水床II・桙高辻の内河遺跡」等	32	正寺寺遺跡	古墳後期~平安	昭和90「二ツ寺遺跡 飛渡田遺跡 中里瓦窯跡古跡」
3	西三社免遺跡	古墳~平安	昭和67年「西三社免遺跡」	33	諏訪西遺跡	古墳後期~平安	昭和91「二ツ寺遺跡 飛渡田遺跡 中里瓦窯跡古跡」
4	桙高西遺跡	古墳~古墳後期~平安・中世	昭和65年「桙高西遺跡」	34	保渡田遺跡	古墳後期~平安	昭和66年「保渡田遺跡」
5	冷水村遺跡	古墳後期~中世	昭和68年「冷水村遺跡・西岡分田山遺跡・吉之庄北・二周古墳」	35	西田地区遺跡群	古墳後期~平安	昭和69年「西田地区遺跡群」
6	西面分田遺跡	古墳後期~平安	昭和68年「合川五郎山・西岡分田山遺跡・吉之庄北・二周古墳」	36	佐久遺跡	古墳後期~平安	昭和69~70年「佐久遺跡」
7	山王寺遺跡	古墳末期~平安	昭和69年「山王寺遺跡会員会1976年山王寺発掘調査報告書」など	37	諏訪西遺跡	平安~中世(20世紀)	昭和69年「諏訪西遺跡」
8	古吉田遺跡	古墳末期~平安	昭和70年「古吉田遺跡会員会1975年古吉田発掘調査報告書」など	38	中林遺跡	古墳後期~平安	昭和83「中林遺跡古跡解説図」
9	北谷遺跡	古墳中期(飛文)	昭和70年「北谷遺跡」	39	奥根城遺跡	中世(13世紀)	昭和85年「奥根城遺跡会員会1985年発掘調査報告書」
10	後定期遺跡	古墳中期~平安	昭和70年「後定期・延喜」	40	上野分野寺	飛真~平安(古墳時代)	昭和86年「上野分野寺の史跡上野分寺跡踏査調査報告書」
11	西面分田遺跡	古墳中期~小墳筑成期	昭和70年「西面分田山遺跡」	41	上野保分寺遺跡	奈良~平安(古墳時代)	昭和86年「上野保分寺の史跡踏査調査報告書」
12	桙高水床II遺跡	古墳~近現代	昭和70年7月「桙高水床II・引原水床遺跡II・桙高水床II・引原水床II・引原水床III・引原水床IV」	42	上野御前城遺跡	奈良~平安	昭和93年委員会1985年「御前城会員会1985年御前城発掘調査報告書」など
13	引間六石遺跡	奈良~平安~中世	昭和70年7月「引間六石遺跡・引原水床遺跡II・桙高水床II・引原水床II・引原水床III・引原水床IV」	43	若狭御前城	古墳(飛鳥跡)	昭和市立古墳資料館販賣第1号など
14	北宿寺町宮跡群	古墳末期(飛鳥期)	昭和70年7月「北宿寺町宮跡会員会1988年北宿寺町宮跡会員会1号」	44	上野分野寺・尼寺	飛文~中世(20世紀)	昭和87「上野分野寺寺宇・中世御前城(1)」など
15	東久保寺町宮跡	古墳終末期(飛鳥期)	昭和70年7月「東久保寺町宮跡会員会1988年東久保寺町宮跡会員会1号」	45	高員戸遺跡	古墳~中世	昭和88年「高員戸遺跡」
16	鶴巣金塚群	古墳後期(飛鳥期)	昭和70年7月「古墳古跡古跡会員会1号」	46	御前城遺跡	古墳後期~平安	昭和90年「御前城遺跡」
17	知東寺町宮跡	古墳終末期(飛鳥期)	昭和70年7月「知東寺町宮跡会員会1号」	47	光城寺西遺跡	古墳~中世	昭和91年「光城寺西遺跡」
18	足門山西古墳群	古墳終末期(飛鳥期)	昭和70年7月「足門山西古墳群会員会1号」	48	渡良瀬小山遺跡群	古墳~中世	昭和93年「渡良瀬小山遺跡」
19	寺屋敷古墳群	古墳終末期(飛鳥期)	昭和70年7月「寺屋敷古墳群会員会1号」	49	御前城御前城遺跡群	飛文~古墳~中世	昭和90年「御前城御前城会員会1号」など
20	寺屋敷~金~熊込遺跡	古墳後期~平安	昭和70年7月「寺屋敷~金~熊込遺跡会員会1号」	50	中尾遺跡	古墳~平安	昭和91~94年「中尾遺跡」
21	度中寺遺跡	古墳後期(飛鳥期)	昭和70年7月「度中寺遺跡会員会1号」	51	浅川北川遺跡	飛文~平安	昭和70年「浅川北川遺跡」
22	金井宮跡・杵木御前城	古墳後期(飛鳥期)	昭和70年7月「金井宮跡会員会1988年金井宮跡会員会1号」	52	浅川北川遺跡	飛文~古墳~中世	昭和70年「浅川北川遺跡」
23	黒沙門寺遺跡	古墳(飛鳥期)	昭和70年7月「黒沙門寺遺跡会員会1988年黒沙門寺遺跡会員会1号」	53	元治小見内寺遺跡	飛文~近江	昭和70年「元治小見内寺遺跡」
24	黒塚古墳群	古墳(飛鳥期)	昭和70年7月「黒塚古墳群会員会1988年黒塚古墳群会員会1号」	54	光城寺西遺跡	古墳~中世	昭和70年「光城寺西遺跡」
25	三ツ寺I遺跡	古墳(飛鳥期)	昭和70年7月「三ツ寺I遺跡」	55	御坂遺跡	古墳~近江~平安	昭和70~74年「御坂遺跡」
26	舟子二子山古墳	古墳(飛鳥期)	昭和70年7月「舟子二子山古墳会員会1号」	56	高員戸古墳	奈良~平安(古墳)	昭和70年「高員戸古墳」
27	高員戸御前城	(飛鳥期~古墳期)	昭和70年7月「高員戸御前城会員会1号」	57	菅谷地区遺跡群	飛文~古墳~中世	昭和85年「菅谷地区遺跡」
28	高員戸御前城	(飛鳥期~古墳期)	昭和70年7月「高員戸御前城会員会1号」	58	三級古寺遺跡	古墳後期(飛鳥)	高員戸古墳会員会1997「三級古寺遺跡」
29	保渡田古墳遺跡	古墳~古墳~中世	昭和70年7月「保渡田古墳会員会1号」	59	菅谷底遺跡	古墳~平安~中世	昭和80年「菅谷底遺跡」
30	桙高寺寺遺跡	古墳~古墳~中世	昭和70年7月「桙高寺寺遺跡会員会1号」	60	菅谷城跡	中世(8世紀)	昭和85年「菅谷城跡」

第1表 周辺の遺跡一覧表

## 第3章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

表土掘削は重機を使用し、As-C 混黑色土（VI層）上面まで慎重に掘削した。As-C 混黑色土上面で遺構検出を行い、堅穴住居跡・溝・畠跡・土坑・ピットを多数確認した。遺構は覆土中の As-B の有無により大別され、As-B を含まない遺構は Hr-FA ブロックの混入の多寡によって細分された。遺構調査の終了後、調査区北壁沿いにトレーナーを設定し、As-C 混黑色土の下層の様子を観察した。

遺構の測量は、断面図を手実測（縮尺 1/20）、平面図を電子平板で行った。平面図中の等高線は 20cm 間隔とした。遺構の写真撮影は、35mmモノクロ・カラーリバーサルのフィルムカメラとデジタルカメラを併用し、主要な遺構については 6 × 7 モノクロ・カラーリバーサルフィルムも使用した。遺跡全景の空中写真はドローン（DJI 社 Phantom 2 Vision+）を使用して撮影した。

遺物注記は注記スタンプを使用して行い、「624 SI01 №1」のように注記した。遺物の写真撮影はデジタルカメラ（Nikon D7000）を使用した。遺構図・遺物実測図・報告書作成とともに Adobe®Creative Suite® でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所には PDF 型式（X-1a;2001）で入稿した。

### 第2節 調査の経過

- 【1月】 19日：西側調査区にて表土の重機掘削を行う。ボックスハウス・器材等を搬入。 20日：調査区北側・東側にて表土の重機掘削を行う。西側調査区の遺構検出作業を行い、堅穴住居跡・溝・畠跡・土坑・ピットを検出する。基準点測量を行う。 21日：1号住居跡 SI01・溝・土坑の掘削を開始する。 23日：2号住居跡 SI02 の掘削を開始する。 28日：ピットの掘削を開始する。 29日：畠跡の掘削を開始する。 31日：SI01 で粘土探掘坑を検出する。
- 【2月】 2日：SI02 カマドの掘削を開始する。 3日：北側・東側調査区の遺構検出作業を行い、畠跡・土坑・ピットを検出する。北側・東側調査区の遺構掘削を開始する。 5日：SI01・SI02 の完掘写真を撮影。空撮準備。 6日：調査区全体の空中写真撮影を実施する。調査区全体の平面測量を行い、SI02 の掘り方調査を開始する。 7日：北側調査区の畠跡でトレーナー調査を行う。SI02 の床下で粘土探掘坑を検出する。 9日：器材等を撤収し、現地調査を終える。
- 【3月】 出土遺物の洗浄・注記・接合、遺構図・写真的整理を行う。
- 【4月】 報告書掲載遺物の実測、遺構全体図の補綴、遺構写真図版作成を行う。
- 【5月】 報告書掲載遺物の復元・写真撮影、実測図トレース、遺構図版作成、報告書原稿執筆を行う。
- 【6月】 遺物写真図版作成、報告書編集を行い、報告書データを入稿する。
- 【7月】 報告書の校正後、印刷製本を行う。成果品の準備を行い、報告書とともに納品する。

## 第4章 標準堆積土層

調査区の西壁や北壁においてI層～X層の基本土層を確認した（現況の駐車場に伴う碎石は除外）。

I層は現代の耕作土である。As-Bを多量に含むが、As-Aは肉眼では判別ができない。

II層は灰褐色土（7.5YR4/1）である。主に西側調査区において、深さ30cm以内の鉄状の断面形状で確認される。一部でAs-Bを塊状に盛り込んでおり、As-B降下からそれほど時期差のない段階の耕作痕と考えられる。

III層はAs-Bの一次堆積層である。西側調査区の堅穴住居跡SI01・SI02周辺において限定的に検出されるところから、廃絶した堅穴住居跡がAs-B降下時まで浅い窪地として残存したことが窺われる。最大層厚は10cm。調査区南西隅付近でもわずかに検出されたことから、近隣に堅穴住居跡の存在が想定される。

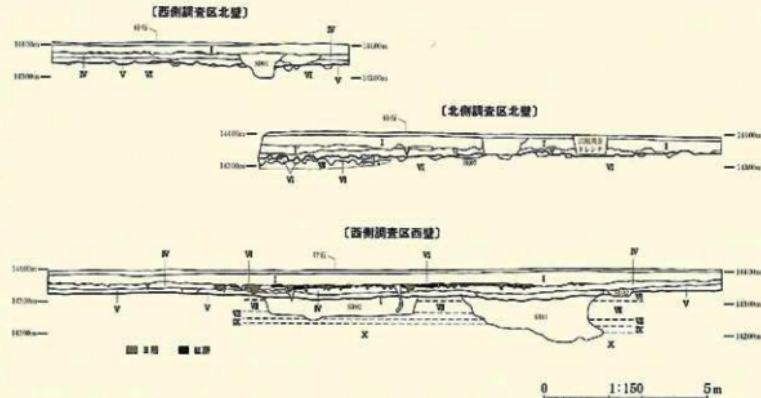
IV層は黒褐色土（10YR3/1）である。As-B降下時の旧表土で、Hr-FAをわずかに含むが、遺物は含まれない。

V層は灰褐色土（7.5YR4/1）である。VI層との間にHr-FAが降下しているが、Hr-FAは一次堆積層としては残存せず、畠跡に塊状に混入するほか、V層にも小塊状に混入している。Hr-FA降下以降の活発な開発活動を示している。またV層の下部には6～7世紀代の土器片が少量はあるが含まれ、畠跡の時期を示す遺物と考えられる。

VI層は黒色土（10YR17/1）である。As-Cを密に混入する。Hr-FAと同様にAs-Cの一次堆積層は開墾によって失われたと考えられ、畠跡の最も削りにおいてVI層段階の鉄状断面が観察されている。今回の調査ではVI層の上面を造構柵出面とした。

VII層は黒色土（10YR2/1）である。As-Cは原則的には含まれない。棟高遺跡群の既往の調査では縄文時代前期から晩期の遺物の出土が報告されている。

VIII層は橙色土（7.5YR6/6）、IX層は褐灰色土（7.5YR5/1）、X層は灰白色土（7.5YR8/2）である。いずれもシルト質ないし粘土質で、榛名山起源の泥流層と理解される。粘土探掘の対象となる土層である。



第5図 標準堆積土層 (1/150)

## 第5章 遺構と遺物

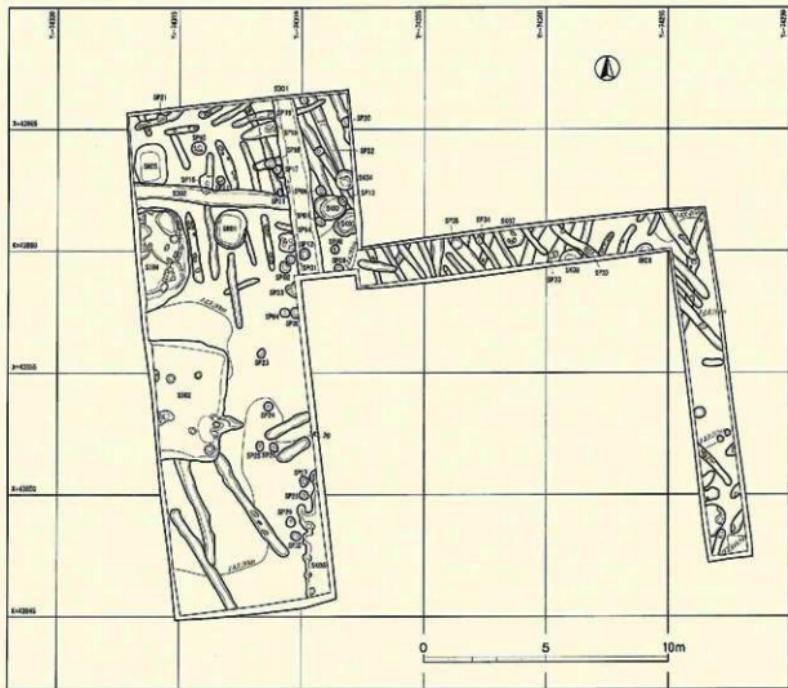
### 第1節 調査の概要

堅穴住居跡2軒と畠跡、溝2条、土坑9基、ピット35基を検出した。

堅穴住居跡の時期はいずれも7世紀代と判断され、1号から2号住居跡への前後関係がある。畠跡はHr-FA降下以後からAs-B降下以前のものであるが、堅穴住居跡と併存する配置やV層出土遺物などから、7世紀代を中心とする古墳時代後期に営まれた可能性が高い。

2号住居跡には縄文土器の小片や5世紀末の土師器が混入するが、Hr-FA降下以前の遺構は検出されていない。しかしAs-C降下からHr-FA降下の間に闇掘が行われていた可能性は指摘される。

奈良・平安時代は、目立った遺構・遺物はなく、As-B降下以後の1号溝や6号土坑が検出された。



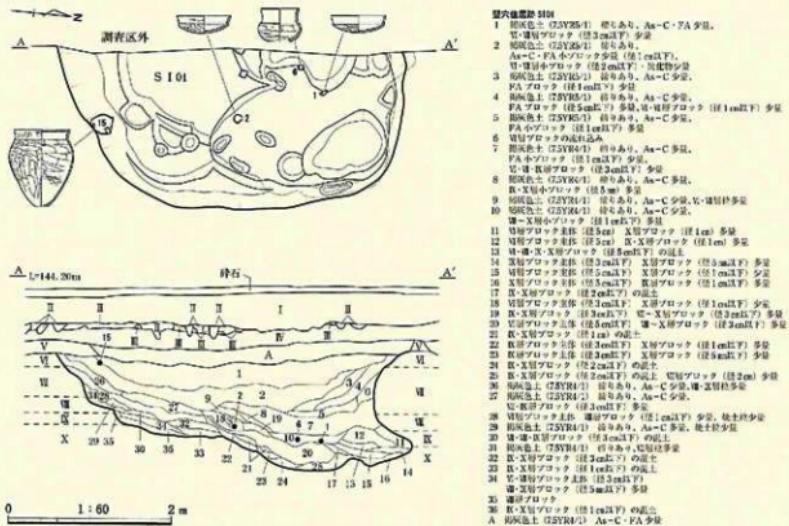
第6図 棟高南寝墓塚遺跡全体図 (1/200)

## 第2節 穫穴住居跡

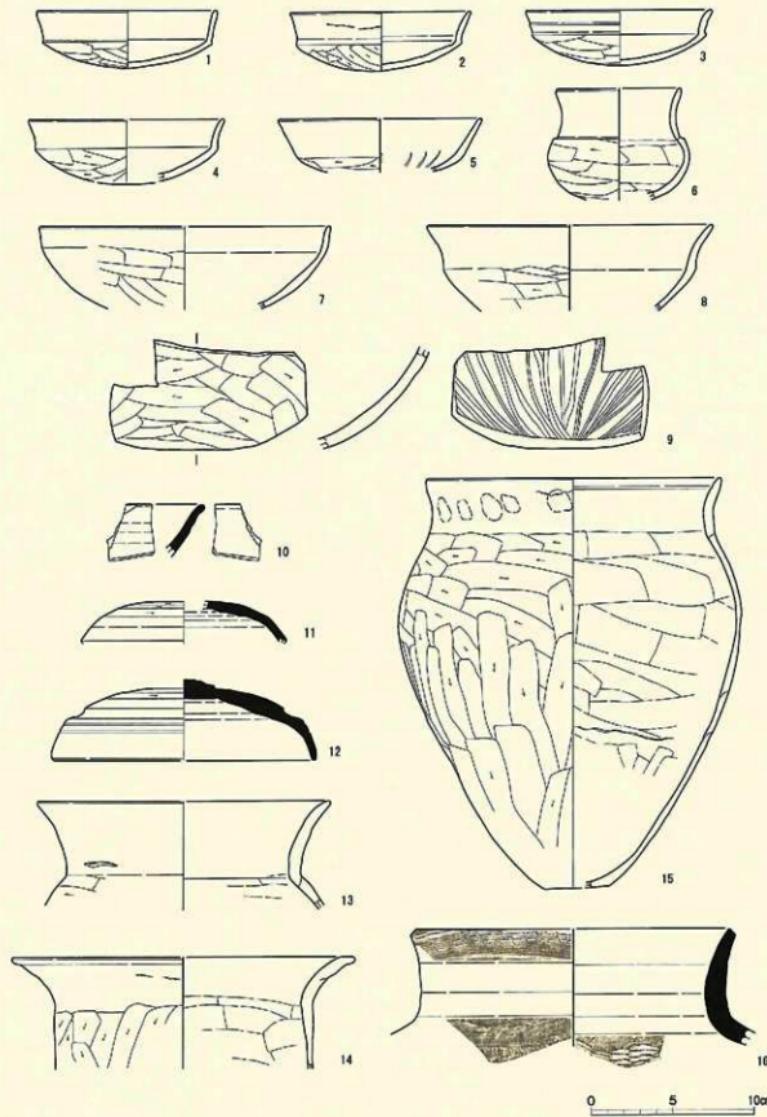
## 1号住居跡（第7・8図、P.L. 3・5）

**形状・規模** 西側は調査区外だが南北416m、東西193m以上の隅丸方形と推定される。廃絶後に粘土探査坑として利用されたため床面は消失しているが、上場が整ったプランで検出されているため竪穴住居跡と判断した。

**重複なし。** 床面 南壁沿いの深さ65cm付近にわずかな平坦面が検出され、床面の掘り方が残存した可能性がある。周溝・貯藏穴・柱穴 不明。カマド 東壁に被焼などのカマドの痕跡が全くみられないことから、調査区外の北壁に設置された可能性がある。方位 東偏N-118°-W。遺物 遺構検出面に近い覆土最上部で須恵器蓋(12)や土師器壺(15)が出土した。下層からは古墳時代後期の土師器壺(1・2)・短頸壺(6)・壺が出土しているが、図示したもの以外も含めて、いずれも底面からは20~30cm上である。須恵器は少なく、図示した以外に壺の破片が数点ある。粘土探査坑 遷精底面で、連続して粘土を採掘したと考えられる土坑群が確認された。土坑は径1.0m規格の円形基盤である。採掘は南から北に向けて行われ、南側の旧坑を埋め戻しながら北側に新たな土坑を掘削している。採掘対象となる粘土はⅦ-X層であり、北側ではⅨ・X層において横穴がみられる。北側の最深部で深さ1.46mである。時期 粘土採掘の時期は下層遺物から7世紀前半と考えられ、1号住居跡もそれに近い時期が想定される。最終的な埋没は9世紀代まで下る。



第7図 1号住居跡平面図・断面図



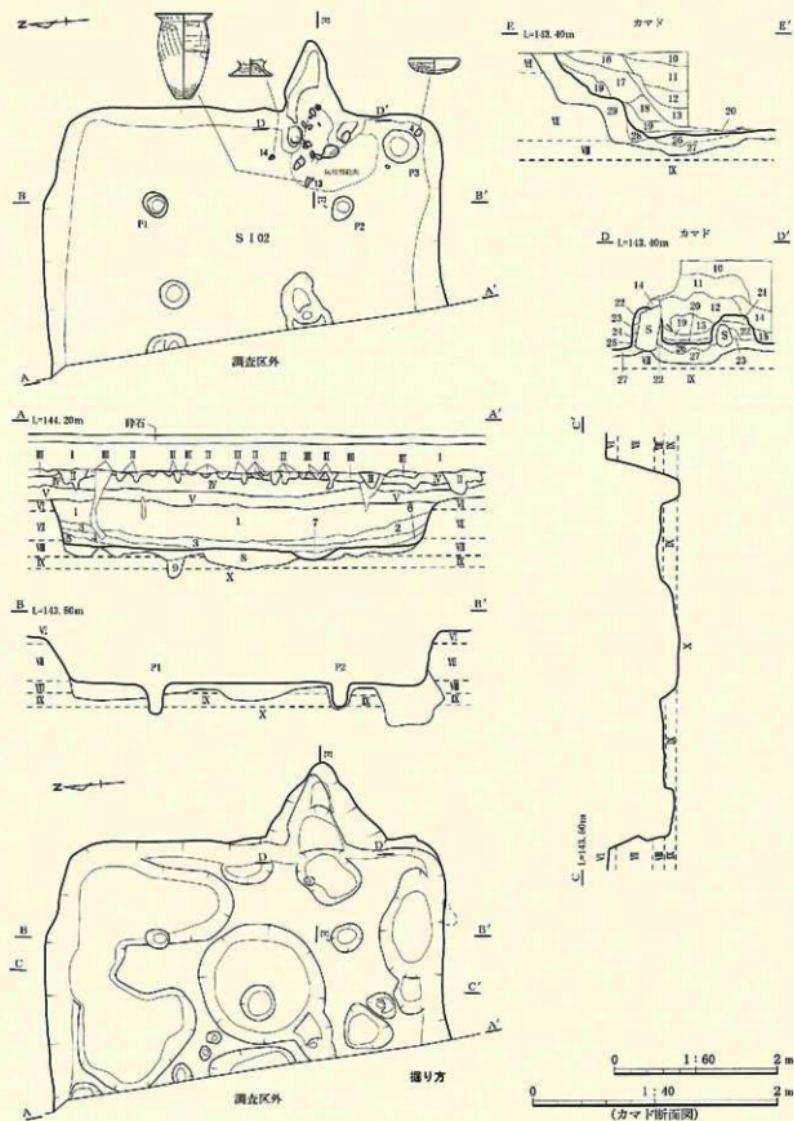
第8図 1号住居跡出土遺物

番号	器種	法量(cm)	①焼成・②色調・③釉色・④残存	成・整形技術の特徴	出土位置	
1	土師器 壺	口径 底径 器高	11.0 — 3.6	①やや良好(軟質)、酸化 ②橙色・白色粒・角閃石 ④1/5欠損	外面 口縁部横擴で、体部～底部鉛削り。 内面 口縁部～体部横擴で、底部鉛削。	覆土下層
2	土師器 壺	口径 底径 器高	11.0 — 3.6	①やや良好(軟質)、酸化 ②にぶい橙色・赤褐色粒・白色粒 ③角閃石・3次欠損	外面 口縁部横擴で、体部～底部鉛削り。 内面 口縁部～体部横擴で、底部鉛削。	覆土下層
3	土師器 壺	口径 底径 器高	11.3 — 3.4	①やや良好(やや軟質)、酸化 ②にぶい橙色・赤褐色粒・白色粒 ③角閃石 ④ほぼ完形	外面 口縁部横擴で、体部～底部鉛削り。 内面 口縁部～体部横擴で、底部鉛削。	覆土
4	土師器 壺	口径 底径 器高	(12.0) — (4.0)	①やや良好(やや軟質)、酸化 ②橙色・角閃石 ③角閃石・1/4	外面 口縁部横擴で、体部～底部鉛削り。 内面 口縁部～体部横擴で、底部鉛削。	覆土
5	土師器 壺	口径 底径 器高	(12.4) — —	①やや良好、酸化 ②にぶい橙色 ③白色粒・赤褐色粒 ④口縁部～体部1/3	外面 口縁部横擴で、体部～底部鉛削り。 内面 口縁部横擴で、作部～底部鉛削状跡。	覆土
6	土師器 短頸壺	口径 底径 器高	(7.5) — —	①良好、酸化 ②橙色 ③角閃石・白色粒・赤褐色粒 ④口縁部～体部1/2	外面 口縁部横擴で、体部鉛削り。 内面 口縁部横擴で、体部鉛削。	覆土下層
7	土師器 壺	口径 底径 器高	(17.7) — —	①良好、酸化 ②橙色 ③白色粒 ④口縁部～体部1/8	外面 口縁部横擴で、体部鉛削り。 内面 口縁部横擴で、体部鉛削。	覆土
8	土師器 壺	口径 底径 器高	(17.4) — —	①やや良好(軟質)、酸化 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④1/8部～体部1/8	外面 口縁部横擴で、体部鉛削り。 内面 口縁部横擴で、体部鉛削。	覆土
9	土師器 鉢	口径 底径 器高	— — —	①良好、酸化 ②にぶい橙色 ③白色粒・黒色粒 ④体部破片	外面 体部鉛削り。 内面 体部鉛削後：放射状溶き、黒色處理。	覆土
10	須恵器 壺	口径 底径 器高	— — —	①やや良、還元 ②灰白色 ③石英・白色粒 ④口縁部～体部破片	外面 横縫整形。 内面 横縫整形。	覆土
11	須恵器 蓋	口径 底径 器高	— — —	①良好、還元 ②灰白色 ③白色粒 ④天井部～体部1/8	外面 横縫整形、天井部鉛削削り。 内面 横縫整形。	覆土
12	須恵器 蓋	口径 底径 器高	(15.9) — —	①良好、還元 ②灰白色 ③白色粒 ④1/2	外面 横縫整形、天井部鉛削削り、体部2条の沈線。 内面 横縫整形。	覆土上層 (検出面)
13	土師器 壺	口径 底径 器高	(17.8) — —	①良好、酸化 ②にぶい橙色 ⑤角閃石・白色粒 ⑥口縁部～脚部上位1/8	外面 口縁部横擴で、脚部鉛削り。 内面 口縁部横擴で、脚部鉛削。	覆土
14	土師器 壺	口径 底径 器高	(20.7) — —	①良好、酸化 ②橙色 ③白色粒・赤褐色粒・黒色粒 ④口縁部～脚部上位1/4	外面 口縁部横擴で、脚部鉛削り。 内面 口縁部横擴で、脚部鉛削。	覆土
15	土師器 壺	口径 底径 器高	18.0 (4.0) 25.2	①良好、酸化 ②橙色 ③角閃石・白色粒・赤褐色粒 ④脚部～底部1/4欠損	外面 口縁部横擴でと折痕頭、脚部～底部鉛削り。 内面 口縁部横擴で、脚部鉛削。	覆土上層 (検出面)
16	須恵器 壺	口径 底径 器高	(19.2) — —	①良好、還元 ②灰白色 ③白色粒 ④口縁部1/8	外面 横縫整形、口縁部鉛削状工具による横竪沈線、脚部平行印記。 内面 横縫整形、脚部平行當て具痕。	覆土

第2表 1号住居跡出土遺物観察表

## 2号住居跡(第9・10図、P.L. 3・6)

形状・規模 西側は調査区外だが南北4.89m、東西3.12m以上の隅丸方形と推定される。深さ55cmである。重複 崩跡(SD25・26)と重複し、2号住居跡が新しい。床面 VII層を掘り抜いてからVI～VII層のブロック土による貼床を施す。床面は全体的に硬化する。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 南東隅のP3。44cm×39cmの円形で深さ8cm。柱穴 4基の主柱穴のうち2基を検出した(P1・P2)。形状は円形で、P1は径32cm×26cm、P2は径31cm×24cmである。深さはP1が39cm、P2が30cmである。カマド 東壁の南寄りに構築される。覆層を主体



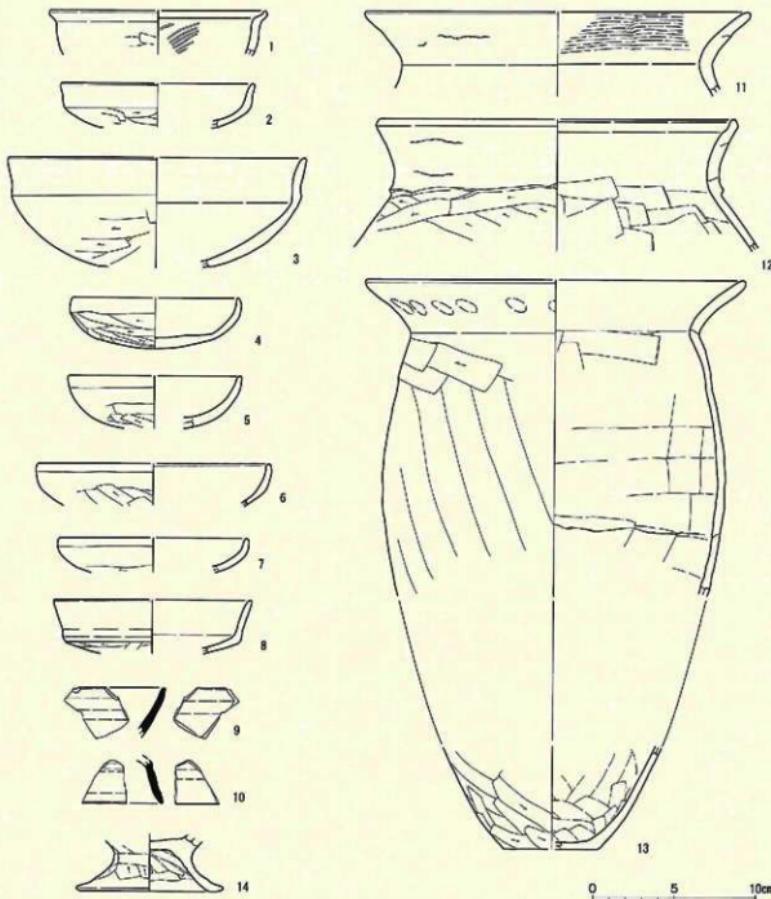
第9図 2号住居跡平面図・断面図

## 第2節 窒穴住居跡

### 壁穴遺物 Site

- 1 黄褐色土 (7SYW4/1) 前りあり。As-C・FA 多量
- 2 黄褐色土 (7SYW4/2) 前りあり。As-C・FA 少量、焼土・灰化物少量
- 3 黄褐色土 (7SYW4/3) 前りあり。As-C・FA 少量、焼土ブロック (径3cm以下) 多数
- 4 黄褐色土 (7SYW4/4) 前りあり。As-C・FA 少量、焼土多量
- 5 黄褐色土 (7SYW4/5) 前りあり。As-C・FA 少量、焼土ブロック (径3cm以下) 多量
- 6 黄褐色土 (7SYW4/6) 前りあり。As-C・FA 少量、焼土ブロック (径3cm以下) 多量
- 7 黄褐色土 (7SYW4/7) 前りあり。As-C・FA 少量、焼土ブロック (径3cm以下) 多量
- 8 白瓦層ブロック (径3cm以下) の底面。残り底面
- 9 白瓦層ブロック (径3cm以下) の底面
- 10 黄褐色土 (7SYW4/1) 前りあり。灰化物少量、FA 少量
- 11 黄褐色土 (7SYW4/2) 前りあり。灰化物少、焼土ブロック (径3cm以下) 多量、FA 少量
- 12 烧土ブロック (径2cm以下) の底面。焼土ブロック (径3cm以下)・灰化物・FA 多量
- 13 灰化土 (7SYW4/2) 中央部。灰化物少、焼土ブロック (径1cm以下) 多量、FA 少量
- 14 灰化土 (7SYW4/2) 前りあり。灰化物少、焼土ブロック (径1cm以下)・As-C・FA 少量
- 15 黄褐色土 (7SYW4/1) 前りあり。灰化物少、焼土・FA 少量

- 16 黄褐色土 (7SYW4/2) 前りあり。焼土ブロック (径1cm以下) 多量、灰化物・FA 少量
- 17 烧土ブロック (径3cm以下) 多量、灰土ブロック (径3cm以下) 多量
- 18 黄褐色土 (7SYW4/1) 中央部上部。灰化物少、焼土ブロック (径5cm以下) 多量
- 19 黄褐色土 (7SYW4/1) 中央部上部。灰化物少、焼土ブロック (径5cm以下) 多量
- 20 灰化土
- 21 黄褐色土 (7SYW4/2) 前りあり。FA 少量
- 22 黄褐色土 (7SYW4/1) 前りあり。FA 少量
- 23 黄褐色土 (7SYW4/1) 前りあり。FA 少量
- 24 黄褐色土 (7SYW4/1) 灰化物少
- 25 黄褐色土 (7SYW4/2) 灰化物少
- 26 黄褐色土 (7SYW4/1) 前りあり。白色灰土ブロック (径1cm以下) 多量、灰土・FA 少量
- 27 黄褐色土 (7SYW4/1) 上部。白島縣土ブロック (径1cm以下) 少量
- 28 白島縣土ブロックと灰化物の混合。灰土灰少量
- 29 黄褐色土 (7SYW4/1)



第10図 2号住居跡出土遺物

## 第5章 遺構と遺物

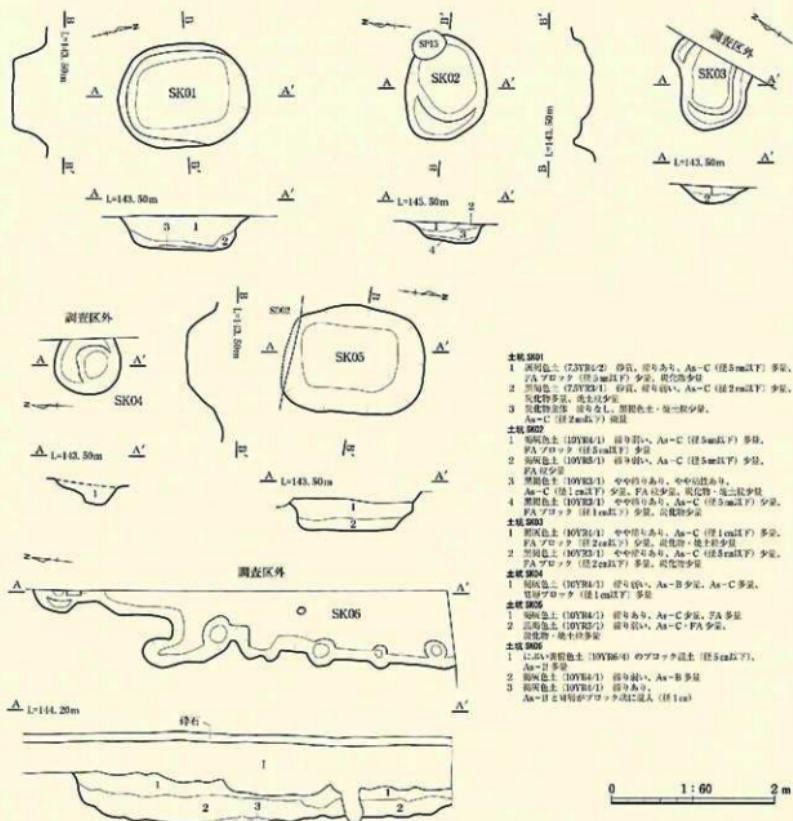
とした粘土で構築された両袖は、豎穴内へ34cmほど張り出す。両袖と豎穴壁面との接点には高さ30cm前後の磚を立て芯材としている。燃焼部は幅40cm、奥行55cmを測り、中央は薄く焼ける。燃焼部からカマド前面と右脇にかけては灰の堆積が確認された。通道部は覆層を主体とした粘土で構築され、豎穴外へ約85cm張り出す。方位 N-96°-E。掘り方 中央に径約15mの円形の床下土坑があり、覆層の採掘坑と考えられる。北壁と南壁沿いには一部で横穴を呈する土坑状の掘り込みがあり、IX-X層の採掘坑である。いずれも床下であるので、1号住居跡のような廃絶住居を利用した採掘ではない。遺物 カマド周辺から土師器壺(13)・台付壺(14)が出土し、住居南東隅では土師器壺(4)が出土した。床面出土遺物は少なく、覆土中から土師器壺・壺の破片が多く出土した。須恵器はごく少ない。土師器壺(13)は床下出土片との接合もあることから、カマドの補強に転用されたものである。時期 時期の古い遺物(1-10)も混入するが、7世紀後半と考えられる。

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③赤土 ④残存	成・整形技法の特徴		出土位置
				外面	内部	
1	土師器壺	口径 (13.1) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②明赤褐色 ③角閃石・白色粒 ④口縁部～体部上部破片	口縁部横撚で、体部削り。 内面 口縁部横撚で、体部削り後に反射状剥き。		覆土
2	土師器壺	口径 (11.8) 底径 - 高 -	①や良好、酸化 ②橙色 ③白色粒・赤褐色 ④口縁部～体部1/8	口縁部横撚で、体部削り。 内面 口縁部～体部横撚で。		覆土
3	土師器壺	口径 (18.0) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②にぼい赤褐色 ③石英・角閃石・白色粒 ④口縁部破片・体部破片	口縁部横撚で、体部削り。 内面 口縁部～体部横撚で。		覆土
4	土師器壺	口径 (10.1) 底径 - 高 - 3.1	①良好、酸化 ②橙色 ③白色粒 ④1/2	口縁部横撚で、体部～底部削り。 内面 口縁部～体部横撚で、底部削り。		南京隅床面
5	土師器壺	口径 (10.0) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②にぼい赤褐色 ③明赤褐色 ④口縁部～体部1/6	口縁部横撚で、体部削り、底部削り。 内面 口縁部～体部横撚で。		覆土
6	土師器壺	口径 (14.0) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②にぼい赤褐色 ③赤褐色 ④石英・角閃石 ④口縁部～体部1/7	口縁部横撚で、体部削り、底部削り。 内面 口縁部～体部横撚で。		覆土
7	土師器壺	口径 (11.4) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②にぼい橙色 ③白色粒 ④口縁部～体部1/7	口縁部横撚で、体部削り、底部削り。 内面 口縁部～体部横撚で。		覆土
8	土師器壺	口径 (12.0) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②松色 ③白色粒・赤褐色 ④口縁部～体部1/4	口縁部横撚で、体部削り。 内面 口縁部～体部横撚で。		覆土
9	須恵器壺	口径 - 底径 - 高 -	①良好、浅元 ②灰色 ③白色粒 ④口縁部～体部破片	被継縫形。 内面 被継縫形。		覆土
10	須恵器蓋	口径 - 底径 - 高 -	①良好、浅元 ②灰色 ③黑色粒 ④口縁部破片	被継縫形。 内面 被継縫形。		覆土
11	土師器壺	口径 (23.4) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②短色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部1/8	口縁部横撚で、脚部削り。 内面 口縁部本口状工具横挽で、脚部削りで、胴部削撚で。		覆土
12	土師器壺	口径 (21.6) 底径 - 高 -	①良好、酸化 ②にぼい橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～脚部上位1/4	口縁部横撚で、脚部削り。 内面 口縁部横撚で、脚部削撚で。		覆土
13	土師器壺	口径 (23.0) 底径 (5.8) 高 -	①良好、酸化 ②橙色～にぼい 黄褐色～明赤褐色 ③角閃石・ 白色粒 ④口縁部1/3・脚部上 半1/6・脚部下段～底部1/3	口縁部横撚でと指頭痕、胴部削り、底部削り。 脚部と底部に被熱した粘土着付。 内面 口縁部横撚で、脚部削撚で。		口縁部と底部 はカマド内と 周辺、脚部は カマド周辺と 掘り方
14	土師器台付壺	口径 - 底径 9.0 高 -	①良好、酸化 ②明赤褐色～にぼい 赤褐色 ③白色粒・片岩 ④右部	台部削り後に捺し、端部横撚で。 内面 台部捺し直し、端部削撚で、脚部下端削撚で。		カマド左脇 (床上9cm)

第3表 2号住居跡出土遺物観察表

## 第3節 土坑・ピット

土坑は9基検出した(第11-12図、P.L.3-6)。1・5号土坑は1号住居跡の北と東に位置し、規模・覆土・主軸方位が類似する土坑である。1号土坑は長軸1.61m×短軸1.27m、深さ47cm、5号土坑は長軸1.72m×短軸1.33m、深さ53cmのいずれも開丸長方形である。覆土下層に炭化物が多量に検出されるが、底面や壁面は焼けていない。2号土坑は長軸1.28m×短軸1.00m、深さ24cm、3号土坑は長軸1.04m以上×短軸1.02m、深さ23cmの梢円形を呈する。4号土坑は径82cmの円形、深さ32cmである。6号土坑は全容は不明だが、南北4.40m以上あり、堅穴状造構の可能性がある。深さ55cmである。西壁のみの検出であるが、壁沿いに深さ5~10cmの小ピットが並ぶ。7

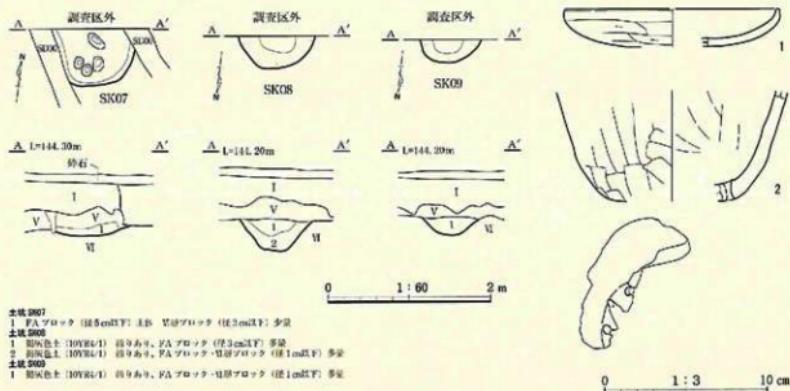


第11図 1号～6号土坑平面図・断面図

## 第5章 遺構と遺物

～9号土坑は径0.7m～1.0mの円形で、深さ10cm～35cmである。いずれもHr-FAを多量に含む。以上の土坑のうち覆土にAs-Bを含むのは4号・6号土坑である。遺物は7世紀代の土師器壊・壺・瓶の破片が1・2・5・6号土坑で少量、須恵器壊の細片が5号土坑で微量に出土した。

ピットは35基検出した。覆土中のAs-Bの有無により二分されるが、いずれも掘立柱建物としての並びはみられなかった。



第12図 7号～9号土坑平面図・断面図、5号土坑出土遺物

番号	器種	法量(cm)	①模成 ②色調 ③土色 ④残存	成・整形技法の特徴		出土位置
				外面	内面	
1	土師器壊	口径 (13.1) 底径 - 高さ -	①良好、酸化 ②褐色 ③白色粒 ④口縁部～全体L/6	口縁部横施で、全体鉛削り。 内面 口縁部～全体横施で。		覆土
2	土師器壊	口径 - 底径 (7.6) 高さ -	①良好、酸化 ②明赤褐色 ③角閃石・白色粒・赤褐色粒 ④底部下部～底部L/5	外縁 鉛削り。 内面 刷毛施施で。 底部焼成前の穿孔 (多孔式)。		覆土

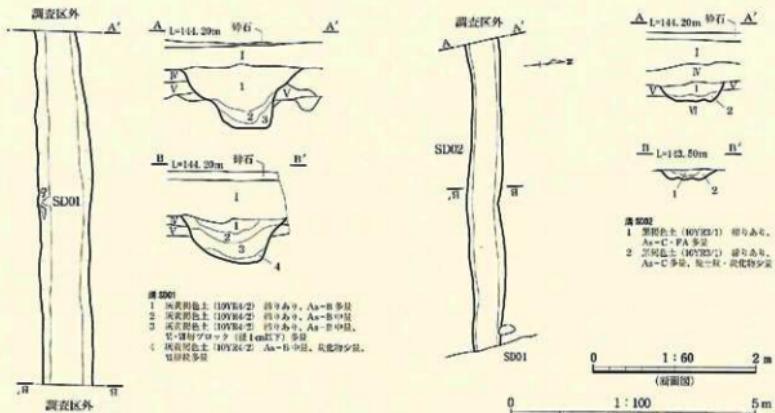
第4表 5号土坑出土遺物観察表

番号	形状	長径/短径/深さ (cm)	出土遺物等	番号	形状	長径/短径/深さ (cm)	出土遺物等	番号	形状	長径/短径/深さ (cm)	出土遺物等
SP01	円形	36.1/36.0/27.8	須恵器壊	SP13	不規形	41.3/33.1/35.1	SK03を切る、As-B合む t. l. 壁部剥離	SP24	円形	36.7/36.5/25.0	As-B合む
SP02	不規形	47.8/41.5/28.2	土師器壊	SP14	不規形	82.9/ - /46.6	SD01に切られる、As-B合む	SP25	扁円形	40.8/30.3/25.3	As-B合む
SP03	不規形	65.1/-/24.7		SP15	不規形	36.1/-/27.7	土師器壊	SP26	不規形	38.9/32.9/16.0	As-B合む
SP04	円形	36.1/35.7/61.4	As-B合む	SP16	不規形	45.5/42.4/49	As-B合む	SP27	不規形	42.5/33.6/23.3	As-B合む
SP05	円形	43.5/-/42.8		SP17	不規形	35.3/34.3/36.4	As-B合む	SP28	円形	37.8/34.3/38.1	須恵器壊、As-B合む
SP06	円形	59.7/35.0/27.0	As-B合む	SP18	不規形	72.8/31.1/36.9	土師器壊	SP29	不規形	42.2/35.9/4.6	As-B合む
SP07	扁円形	43.7/32.5/26.8		SP19	円形	33.7/-/39.8	土師器壊	SP30	不規形	45.4/35.1/35.7	As-B合む
SP08	円形	36.4/34.5/12.5		SP20	円形	40.7/-/48.8	土師器壊	SP31	扁円形	33.4/17.4/35.7	
SP09	円形	36.4/-/49.8	As-B合む	SP21	円形	38.7/-/23.7		SP32	不規形	38.2/28.7/39.8	
SP10	円形	56.6/56.1/26.6		SP22	不規形	38.5/33.0/31.4	土師器壊・As-B合む	SP33	小円形	27.2/23.3/21.8	須恵器壊
SP11	円形	35.5/33.3/10.9	土師器壊	SP23	不規形	39.0/31.3/20.9	As-B合む	SP34	円形	30.9/27.6/24.2	
SP12	円形	45.3/42.0/15.5	SD01底面で検出					SP35	円形	48.5/46.1/36.1	

第5表 ピット一覧表

## 第4節 溝

島跡と判断した小溝を除き、2条の溝を検出した（第13図、P L. 4）。1号溝は南北に直線的に延びる溝である。調査区内では長さ7.27mあり、方位はN-9.1°-Wである。島跡やピットと重複し、1号溝が新しい。調査区北壁の観察では上幅15cm、下幅45cm、深さ80cmの逆台形を呈する。底面は南に向かって傾斜しており、北端より南端が9cmほど低くなる。覆土にはAs-Bが多く含まれる。遺物は7世紀代の土師器壊・壺が比較的多く、9世紀代の須恵器壊が少量出土したが、いずれも細片ばかりである。2号溝は東西に直線的に延びる溝だが、東端は1号溝に切られて途切れる。調査区内の長さは6.32mで、方位はN-84.9°-Wである。島跡と重複し、2号溝が新しい。調査区西壁の観察では上幅80cm、下幅50cm、深さ28cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。遺物は7世紀代の土師器壊・壺の細片が少量出土した。

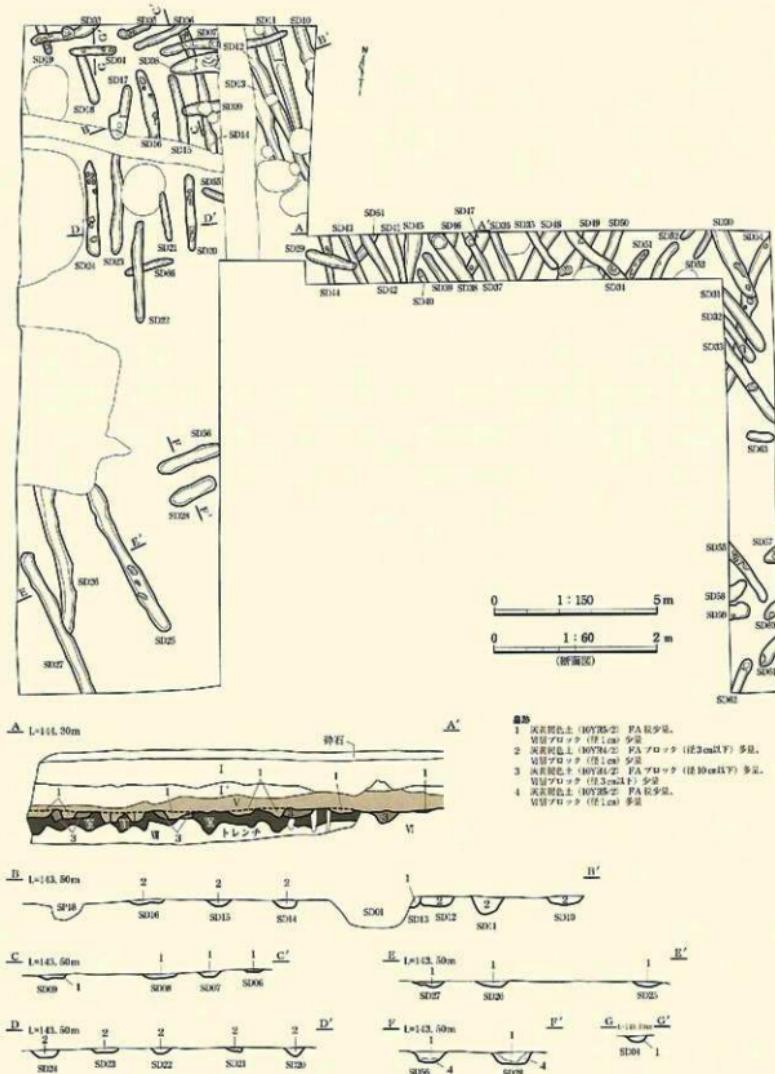


第13図 1号・2号溝平面図・断面図

## 第5節 島跡

調査区の北側を中心に島の跡を考慮される小溝を多数検出した（第14図、P L. 4）。覆土や切り合いによって、3段階に分類される。

新しい段階の島跡はV層との区別が難しい灰黄褐色土（1層）を覆土とし、Hr-FAの含有は少ない。SD03～09・13・25～44・55・56・63・65・66が該当し、東西方向と南北方向の2方向に細分される。SD03～09は概ねN-75°-Eの方位で緩やかに蛇行する。島跡の幅は30cm前後、深さは5cm前後、島跡の間は概ね25cmである。SD30～44は概ねN-32°-Wの方位で直線的である。島跡の幅は25cm～50cm、深さは5cm前後、島跡の間は20cm



第14図 出露平面図・断面図

~90cmである。

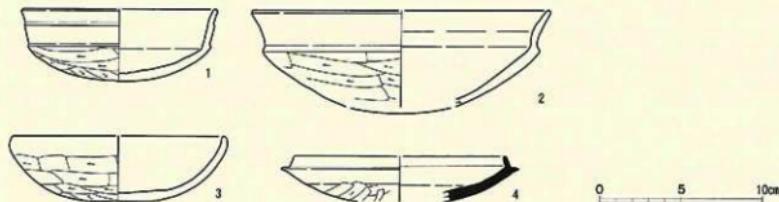
次の段階は灰黄褐色土(2層)を覆土とし、Hr-FAの小ブロックを多く含む畠溝である。SD10~12・14~24が該当する。概ねN-13°~Wの方位で直線的である。畠溝の幅は20cm~40cm、深さは5cm~10cm、畠溝の間は20cm~90cmである。

最も古い段階はHr-FAのブロックを多量に含む灰黄褐色土(3層)を覆土とする畠溝である。Hr-FAに汚れが少なく、Hr-FA低下後まもない時期の岩跡と考えられる。SD45~54・57~62・64が該当する。概ねN-19°~Eの方位で直線的である。畠溝の幅は30cm~45cm、深さは5cm~10cm、畠溝の間は40cm~80cm前後である。

畠溝からの出土遺物は、7世紀代の土師器壊・壺が少量である。

## 第6節 遺構外出土遺物

表土掘削及び遺構検出の際にV層から遺物が出土している。東側・北側調査区では少なく、堅穴住居跡のある西側調査区で多い。堅穴住居跡(SI01・02)と同じ7世紀代の土師器壊・壺が大半で、8世紀に下る土師器壊がごく少量ある。須恵器は壊・瓶・壺の細片がごくわずかにある。新しい段階の岩跡がV層とほぼ同じであることから、この段階の遺物である可能性がある。



第15図 遺構外出土遺物

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土位置
1	土師器 壊	口径(118) 底径 高さ 4.5	①やや良好、焼化 ②白色系・黑色系 ③白色系 ④口縁部2/3欠損	外面 口縁部横挫で、体部~底部削り。 内面 口縁部~体部横挫で、底部削り。	東区V層
2	土師器 壊	口径(18.0) 底径 高さ (6.4)	①やや良好、焼化 ②白色系・黑色系 ③白色系 ④口縁部~体部1/5	外面 口縁部横挫で、体部旋削。 内面 口縁部~体部上部横挫で、体部下旋削で。	北区V層
3	土師器 壊	口径(12.9) 底径 高さ 4.0	①良好、焼化 ②にぶい淡色~ 黒色 ③白色系・赤褐色系 ④1/4	外面 口縁部横挫で、体部~底部削り。 内面 口縁部~体部横挫で、底部削り。	西区V層
4	須恵器 壊	口径(12.8) 底径 高さ -	①良好、深元 ②灰色~胡桃 リーブ灰色 ③白色系 ④1/8	外面 腹壁整形、底部手持ち削り。 内面 腹壁整形。	西区V層

第6表 遺構外出土遺物観察表

## 第6章 調査成果

棟高遺跡群では5世紀後半頃から堅穴住居の構築が始まり、畠跡も広範囲に確認される。榛名山噴火後の空白期を経て6世紀末に再び住居が構築され、10世紀まで継続する。本調査は小規模なものであったが、堅穴住居跡や粘土採掘坑、壺跡などの成果が得られた（棟高遺跡群の概略図は第2図参照）。

Hr-FA以下の畠跡は東北に隣接する棟高水窪Ⅲ遺跡に中心があり、今回の調査地点への広がりは十分に想定された。同遺跡では、畠上まで覆うHr-FA一次堆積層が降下ユニットを保ったまま、風化や雨水の擾乱によってブロック状になった状態を検出している。しかし本調査の畠跡で古いものはHr-FAがブロック状に混じり汚れも少ないものの、降下ユニットを保った状態とは判断できず、Hr-FA降下まもない時期の畠跡と判断した。棟高辻の内Ⅳ遺跡では、Hr-FA降下後の畠跡で6世紀末の堅穴住居に切られるものがあり、これと同じ6世紀後半頃の畠跡と考えたい。この時期の遺物はほとんどなく、居住が明確になるのは7世紀になってからである。

6世紀末から7世紀にかけて棟高遺跡群の広範囲に堅穴住居跡が確認される。本調査の堅穴住居跡2軒もこの時期のものである。1号住居跡は廃絶後に粘土採掘坑として再利用されている。床面や柱穴は消失しているが、整った隅丸方形プランをもつこと、東に近接する棟高水窪Ⅲ遺跡134B区H-1号住居跡と同じ7世紀前半で輪方位が一致することから、堅穴住居跡と判断した。棟高遺跡群では、棟高水窪Ⅲ遺跡134J区H-22号住居跡（8世紀前半）の住居西半で採掘する事例、同遺跡106C区において溝状に採掘する事例（時期不明）がある。住居のカマドなどの構築材としての利用も考えられるが、2号住居跡をみると、カマドの構築材には埴層が使われ、粘土採掘が考えられる床下土坑も埴層を対象としている。これに対して、1号住居跡の粘土採掘坑はIX-X層を対象としており、粘土の利用目的が異なることが想定される。この時期に廃絶住居を粘土採掘坑に利用した事例は、前橋市東田之口遺跡にあり、検出状況はよく似ている。同遺跡では廃絶住居以外にも、谷地を利用した大規模な粘土採掘も行われているが、粘土の利用目的は明らかにはされていない。土器製作の生地や窯体などが候補となるが、生産遺構そのものの検出や粘土の胎土分析などが前提であり、現状での判断は難しい。1号住居跡と方位を揃える1・5号土坑が近接し、裂岩土坑の可能性があることに注意しながら、類例の検出を待ちたい。

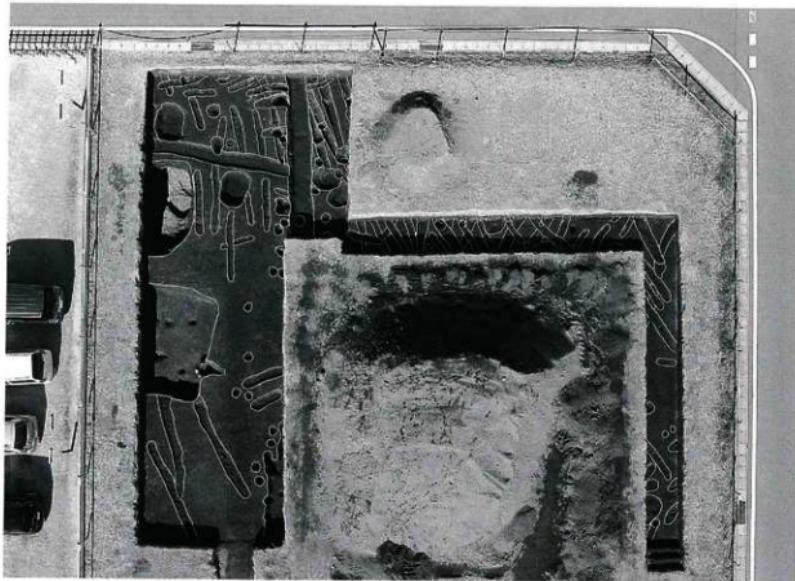
Hr-FA混土以外の畠跡は、堅穴住居跡と重複しないことや、周辺の出土遺物から、堅穴住居跡と同じ7世紀を中心とする時期が考えられる。8~10世紀には遺構が全く検出されなかつたが、畠跡の継続が推測される。As-B降下以後は1号溝が掘削される。しっかりとした掘り込みをもち南北に直線的に延びる溝であるが、南に隣接する棟高水窪Ⅲ遺跡106C区では検出されておらず、中世の区画溝であろうか。周辺に同種の埴土をもつビットがあり、付随する可能性がある。堅穴住居の跡地に部分的に残るAs-Bを断面で観察すると、畠跡のような連続する小溝がみられることから、中世においても畠地として利用された可能性が指摘される。

なおHr-FA混土の畠跡をサンプル的に断ち割った断面では、下層のAs-C混黒色土（VI層）を覆土とする畠状の起伏が捉えられたことから、4世紀代の畠跡が存在する可能性も考えられる。棟高遺跡群では近年、4世紀代の墓域の存在が確実となっていることから、同時期の生産域の調査も必要であろう。畠状遺構はAs-Cを含まない埴層を検出面としても十分に検出できる深さをもっており、今後、調査の対象となることを期待したい。

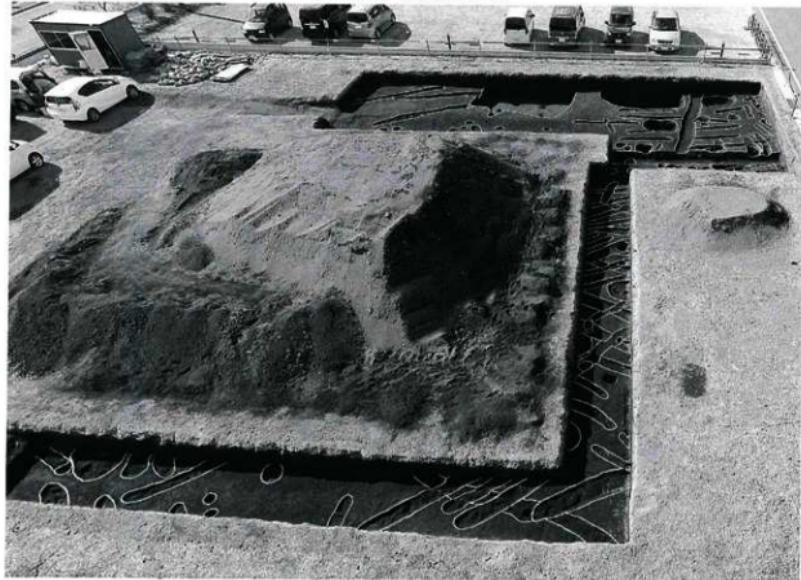
### 参考文献

- 中室耕志 2004 「古代群馬の粘土採掘坑－流志江中宿遺跡をめぐって－」[研究紀要22] 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬県高崎市教育委員会 2008 「棟高遺跡群 棚高水窪Ⅲ・棟高辻の内Ⅳ遺跡」
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 2011 「東田之口遺跡」
- 群馬県高崎市教育委員会 2013 「棟高遺跡群Ⅰ」

# 写 真 図 版



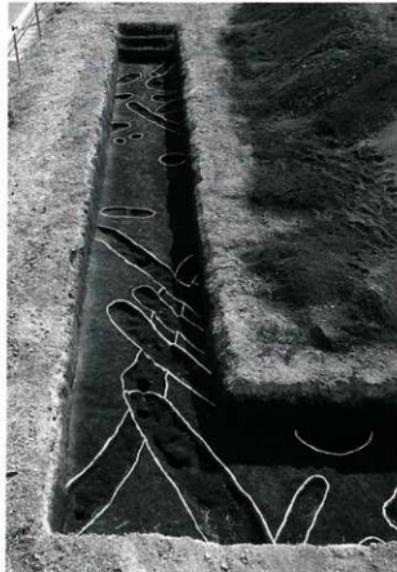
調査区全景（空撮、上が北）



調査区全景（空撮、東から）



西側調査区北部全景（南東から）



東側調査区全景（北から）



西側調査区北部全景（東から）



西側調査区南部全景（北西から）



1号住居跡全景（南から）



2号住居跡全景（西から）



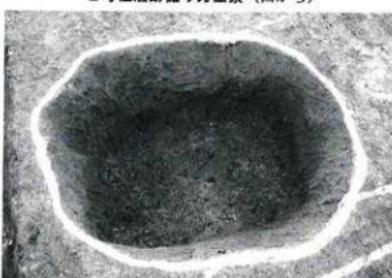
2号住居跡カマド全景（西から）



2号住居跡掘り方全景（西から）



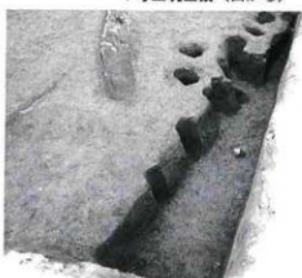
2号住居跡カマド掘り方全景（北西から）



1号土坑全景（西から）



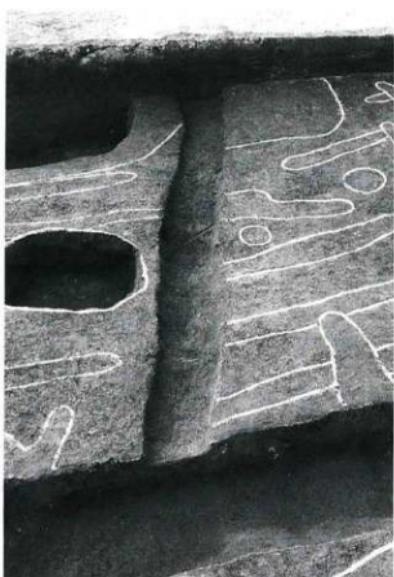
5号土坑全景（東から）



6号土坑全景（南から）



1号溝全景（南から）



2号溝全景（東から）



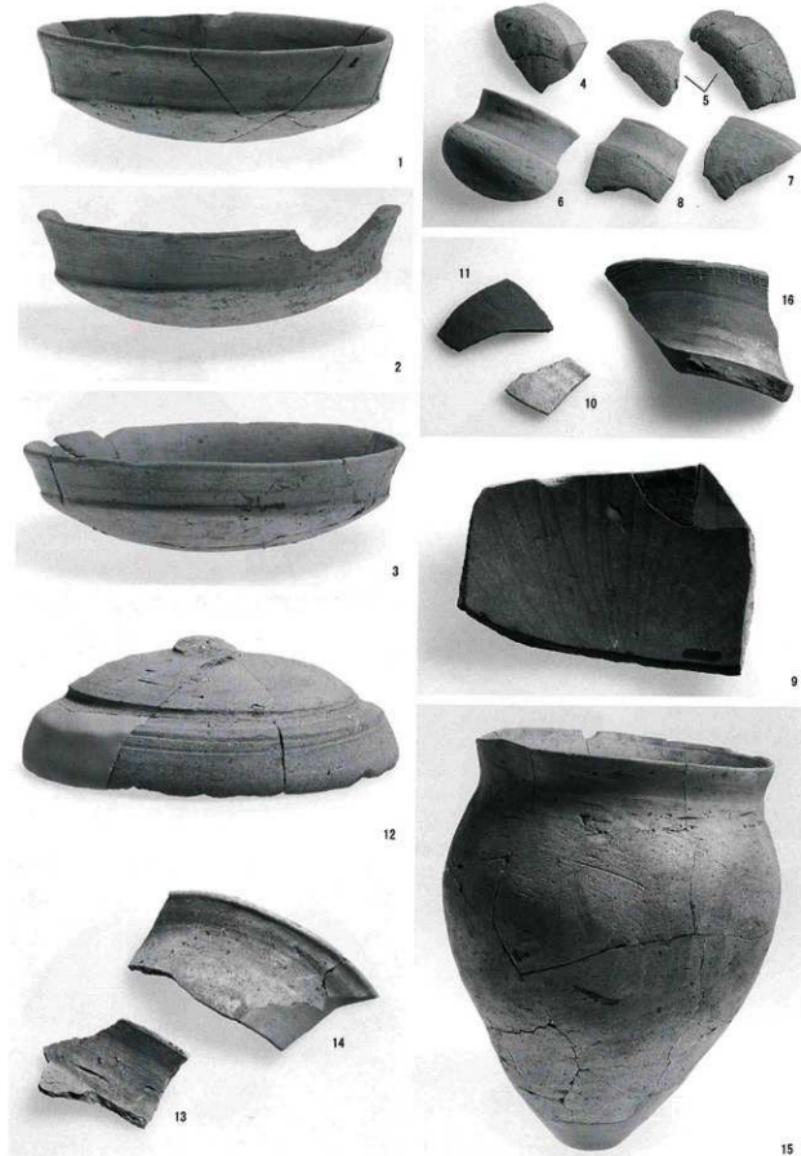
北側調査区畠跡土層断面（南東から）



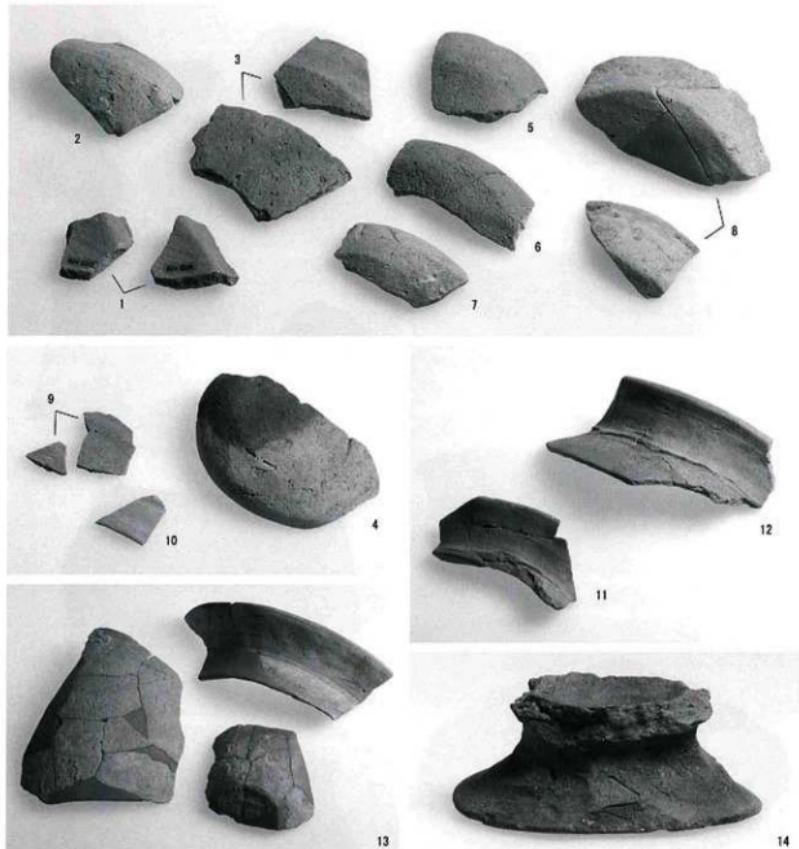
北側調査区畠跡土層断面（南から）



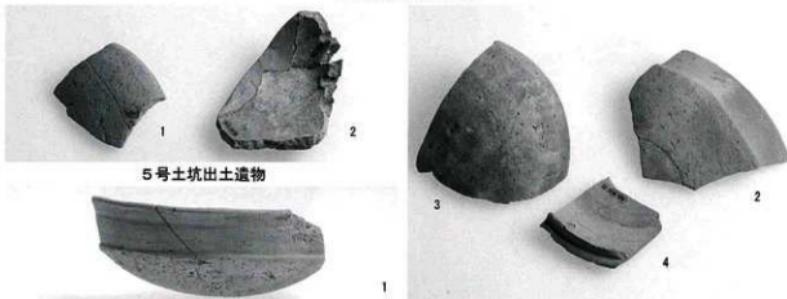
北側調査区畠跡土層断面（南から）



1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



5号土坑出土遺物

遺構外出土遺物

抄 錄

フリガナ	ムナダカミナミネボクボイセキ							
書名	柳高南寢跡遺跡							
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
卷次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第351集							
編著者名	田邊芳晴 常謙尚							
編集機関	有限会社毛野考古学研究所							
調査機関所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公用町1002番地1							
発行機関	有限会社毛野考古学研究所							
発行年月日	西暦2015年7月31日							
ふりがな 所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
柳高南寢跡遺跡	群馬県高崎市 柳高町	102020	624	36° 23' 33"	139° 00' 18"	20150119 / 20150206	189.15 m <sup>2</sup>	店舗建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
柳高南寢跡遺跡	集落跡	古墳時代 (6~7c)	住居跡 2軒 粘土抹壁1基 土坑 7基 ピット 22基 呂跡	土師器、須恵器			7世紀を主体とする古墳時代後期の集落跡。 廃絶した堅穴丘原跡を利用した粘土抹壁を 復出した。	
		時期不明 (平安時代末以降)	土坑 2基 溝 1条 ピット 13基	土師器、須恵器				

---

高崎市文化財調査報告書第351集

## 棟高南寢暮窪遺跡

2015年7月30日印刷

2015年7月31日発行

編 集／有限会社毛野考古学研究所

〒 379-2146 群馬県前橋市公園町 1002番地1 電話 027(265)1804

発 行／有限会社毛野考古学研究所

印 刷／中村印刷工業株式会社

〒 030-0030 富山県富山市東町2丁目3-22 電話 076-424-4616

---